

原子力技術と社会の関係論

新技術導入を意識面から捉えなおす

2010年9月10日

篠田佳彦(若狭湾エネルギー研究センター)

shinoda.yoshihiko@plum.plala.or.jp

専門家／市民の意識の障壁とその対応がポイントか

→市民と専門家の意識・考え方を

知ることから開始 → いろいろな種類の障壁

そこで！

意識を調査した結果の紹介

原子力技術に対する見方の時代変化

夢の段階 期待・ワクワク感・発展可能性がありそう, かつ, 見えない
期待の新人
期待が大きい間は, ミスが許される
→大きく化ける可能性が“過大評価”されがちになる

現実の段階 期待・ワクワク感・発展可能性は薄い, かつ, 見えている
そこそこ活躍した中堅
要求した最小限の仕事の達成, ミスは許されない
→今できることだけやって! それ以上はしないでね

原子力技術に対する見方の時代変化

現行の原子力(主に軽水炉による発電)は既成のものとして”受け入れられている”が、新たな技術導入には躊躇を求めている状況

現時点での必要性は89%が認識(東工大の調査結果より)

将来における必要性

- ・必要 53.6%
- ・不要 8.7%
- ・状況による 29.8% →賛否態度に強く関連

核燃料サイクルなどの導入に関しては、プルサーマルをも含めて新たな技術導入としての”待った状態”が現状を写していると言える。

- トリウム利用は, どっち? 既存に近いものと思わせる
- LOHAS的価値観と「原子力利用を求める価値観」の対立
- LOHASな原子力=黒い白馬か!

実績のジレンマ

実績のない(期待も高くはない)新技術
実績を積んだ技術ならOKが市民のスタンス
→どうやって, 実績を確保するのか

意に反して, 実行されている行為における『失敗』には, 非寛容
どうすることもできない行為における『失敗』も同様

ウラン燃料の軽水炉は, 「(良くも悪くも)実績」として認められている
MOX利用は, 軽水炉として「実績の範疇での高度化」とは見ない

プル利用を特別視し, 懸念しているわけでもなさそう!

2030年: 次世代軽水炉と「うまく」融合することか?

市民社会と協働し, 方向性は見出し, 決意として実行していく!